

沖縄戦記録・文学試論：時期区分について

仲程, 昌徳 / ナカホド, マサノリ / NAKAHODO, Masanori

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

140

(終了ページ / End Page)

158

(発行年 / Year)

1980-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015558>

沖繩戦記録・文学試論

——時期区分について——

仲程昌徳

沖繩戦は、一九四五年六月二十三日をもって終了した、と普通されている⁽¹⁾。その開始を那覇の街が灰燼に帰した時におけば、前年の一九四四年十月十日になろうし、また米軍の沖繩上陸作戦が整った時点に求めればさらに異った日にちを置くことも可能であろうが、本島上陸をとれば、一九四五年四月一日ということになる。⁽²⁾

沖繩の戦いを、ここで米軍の本島上陸から日本軍の組織的戦闘の終焉までと、普通に考えられている通りの日にちに従えば、その間八十日余、三ヵ月足らずの戦闘であったということになる。八十日余の日数は、日常的な時間で計れば僅かな期間であったに過ぎない。しかし、その僅かな期間で、沖繩のすべてが烏有に帰したのである。

いかなる戦争であれ、その期間の長短に関わらず、戦場が悲惨な様相を呈することは言うまでもな

いが、沖縄の戦いは、とりわけそのうちでも特筆されるべき状況を現出させた。その理由は、いろいろとあげることができよう。例えば、沖縄戦には「他と異なる三つの特徴がある」として、伊藤正徳は「一は日本の領土内における初の陸上戦闘であったこと、二は市民が直接に戦闘に参加したこと、三は航空総攻撃が大規模の『特攻』を中心として敢行された」ことをあげている。伊藤のあげているその三つは、伊藤自身が触れているとおりに、必ずしも沖縄のみで現出した事態ではないが、沖縄で際だったあらわれかたをしたことは確かである。

敗戦後、そのような沖縄戦に関する書物が多く刊行された。それは、恐らく一つの戦場に関する限り、類をみることにない量に上ると思われるが、そのことは他でもなく、沖縄戦が多くの惨劇を生んだことよってはいはずである。

際だった戦闘を強いられた沖縄戦を契機として生まれた記録・文学に関して、これまで統括して考察されたことがほとんどなかった。⁽⁵⁾それはそれなりの理由があると思われるが、沖縄戦後史の流れの中で、戦争記録・文学がどのようなかたちをとってあらわれてきたか、一つの鳥瞰図を作ってみるとは意味のある仕事であるように思われる。

沖縄戦について書かれたものすべてを文学として取り扱うことは無論できないが、ここでは軍関係の記録を除いて、⁽⁶⁾小説は勿論、その他の体験談、手記等を含め、広く記録・文学として取り上げてみたい。まず、これまでに刊行された戦争記録・文学の時期区分が必要になってくるが、その前に、沖

繩戦後史の時期区分をみておく必要があると思われる。それによって、戦争記録・文学がどのようなあらわれかたをしたか、明瞭になると思われるからである。

新崎盛暉は、沖繩の戦後史を次のように規定している。

沖繩戦後史は、米軍の沖繩占領、軍政府の設立にはじまり、日本への返還によって終わる。それは、第二次世界大戦の終了およびベトナム戦争の終結という世界史的な画期と密接な関連をもつと同時に、日本戦後史の一環でありながら、相対的独自性をもって展開する。^(?)

戦後沖繩の歴史の大枠と同時に、戦後沖繩のになった独特な意味をも右の引用から汲み取ることができるはずであるが、新崎は、そこで沖繩の戦後史を、アメリカによって占領されていた期間に限定している。

〈戦後〉をどう枠取りするか、その規定の仕方にもいろいろあろう。が占領から返還までの異民族支配下にあった期間、いわゆる日本戦後史の中で「相対的独自性」を持って進化した期間を「戦後」として取り扱うことにはそれほどの異論があるはずはない。

新崎は、「日本戦後史の一環でありながら、相対的独自性をもって展開」した、異民族支配下二十年間の歴史を、「九つの時期に分けて考えるのが便利である」として、細かくみていつている。ここで、その「九つの時期」の年代区分だけをとり出して引用しておきたい。

(1)第一期 一九四五年四月ないし六月から一九四九年後半までである。

(2) 第二期 一九四九年後半から、一九五一年九月あるいは一九五二年四月までである。

(3) 第三期 対日平和条約の締結ないし発効から、一九五六年六月までである。

(4) 第四期 一九五六年六月の「島ぐるみ闘争」の爆発から、五八年後半、通貨のドル切り替え、日米安保条約改定交渉の開始、土地闘争の終結にいたる時期である。

(5) 第五期 五八年後半から、六二年一月までである。

(6) 第六期 六二年二月一日から、六四年末までである。

(7) 第七期 六四年末から六七年二月にいたる時期である。

(8) 第八期 六七年二月から、六九年二月まで、いかえれば、教公二法阻止闘争から、二・四ゼネストまでの時期である。

(9) 第九期 六九年二月以降である。⁽⁸⁾

この「九つの時期区分」の一期ごとの期間をみていくと、(1)四年、(2)二年、(3)四年、(4)二年、(5)四年、(6)二年、(7)三年、(8)二年、(9)三年というふうになっている。一つの時期が、長くて四年、短かくしかも最も多い期間が二年である。この区分のあらわれかたは、少なくとも沖繩の戦後史が、激動していたことの端的なあらわれであることを示しているよう。「占領下」という言葉の意味は、またそういう意味でもあるはずである。

新崎の戦後沖繩史の時期区分は、言うまでもなく政治史、或いは社会史的な変動を基軸にしてなき

れたものであり、文学が、直接的に時代の変動と軌を一にするもので必ずしもないことからすれば、それをすぐに文学史の時期区分として踏襲することはできない。とは言え、いかなる時期区分をするにしても、歴史の変動を基軸にした区分がすべての基礎になるわけであり、その下敷きが明確になされてなければ、視野は広がってこないはずである。

戦後沖繩の歴史過程を「文学を生み出す環境」として区分してみることから、文学史の区分を再構成してみせたのは岡本恵徳であった。⁽⁹⁾ 岡本は、「太平洋戦争で灰燼に帰した沖繩の文学活動の、昭和二十年から昭和四十七年に至る過程を展望しよう」と試みて、まずそこで「文学を生み出す環境としての沖繩の戦後の歴史過程を概括」している。

岡本の場合も、新崎と同様に「軍政府の設立にはじまり、日本への返還」まで、すなわち異民族支配下におかれていた期間の時期区分になっているが、その全く同じ期間を、岡本は五つの時期に区分している。それを次に掲げておきたい。

- ① 敗戦後から昭和二十四年頃までの空白と混乱の時期。
- ② 昭和二十五年の新中国の成立から朝鮮戦争を契機とする基地建設と反共政策の強化された時期。
- ③ 昭和三十年頃の「島ぐるみ闘争」を経て米軍政に対して抵抗運動が激化しその後沈滞していく時期。
- ④ 昭和三十六年頃の消費ブームの中で大衆社会的な状況が現われる一方、「祖国復帰運動」が定

着する時期。

⑤ 昭和四十年頃の「祖国復帰運動」の昂揚の中で「祖国」と「沖縄」が新たに問いかえされる時期。

新崎、岡本の時期区分を対照させると、①―①、②―②(3)、③―④(5)、④―⑥、⑤―⑦(8)(9)というふうに対応していく。二つの区分の間で、①と④に重なりがみられるのは、終戦直後の混乱期と、混乱から立ち直って一つの目標が確立し、統一的に動いていた時期とである。あとの区分がわれるのは、新崎のそれが二年の単位を中心に区切っているのに対し、岡本は一時期五年をとっているためである。それはまた、「政治運動を中心」にした区切りと、「文学の環境」を基にした区切りとの相違による。

占領下における時期区分として、岡本は「文学的環境」から全体を五期に分ける案を提出し、それを今度は、「文学的活動」の発揚を通して区分している。一種の文学史的区分ということになるであろうが、「仮説」として、占領から返還までの二十七年間を三期にまとめられている。それは、次のような区分になっている。

第一期 一九四五(昭和二十)年―一九五一(昭和二十六)年頃まで

第二期 一九五二(昭和二十七)年頃―一九六一(昭和三十六)年頃まで

第三期 一九六二(昭和三十七)年以降

第一期から第三期までの特徴をみていくと、第一期は、「敗戦の虚脱と空白の中から次第に文学創

造の機運が盛りあがってくる時期」で、新聞、雑誌等が相次いで刊行され、「文学の理論や方法的な自覚は乏しい」が、文学活動が意欲的に行なわれていく時期であり、第二期は、「米軍の反共的な強圧的な政策が強まり、それと共に、この米軍の政策を軸にして住民運動が激しい動きを示すいわば政治の季節」で、「琉大文学」派を中心とした抵抗の文学の主張、明確な方法意識を持って詩作活動を展開した「珊瑚礁」派の登場というように「戦後に登場した作者たちと、戦前から活動してきた人達の間」に世代の交代がみられる」時期でもあった。第三期は、「社会的・政治的には、〈祖国復帰運動〉を軸に沖縄の諸状況が展開した時期」であり、文学活動が盛んになり「文学意識や方法が多様化し、個人的な詩集や雑誌、あるいは同人誌が輩出する時期」である。また、『新沖縄文学』(沖縄タイムス社刊)が刊行され、それに掲載された大城立裕の「カクテル・パーティー」⁽¹⁰⁾が芥川賞を受賞したことによって、大きな刺激を若い書き手たちにあたえたのも第三期に入ってからである。

以上のように、戦後沖縄文学の動向を、岡本は三期に分けて考えている。その区分は、いってみれば、四十年代、五十年代、六十年代というふうに、年代区分に従ってみているとも言えようが、仮説として提出されたその区分が、今のところ最も有効な戦後沖縄文学史の時期区分であることは疑いえない。

沖縄の戦後文学史は、そのように三つの時期区分で今の所包括できるわけであるが、それはいうまでもなく岡本の指摘にもあるように、日本文学史の一部である。戦後沖縄文学史をみていくうえで、

また戦後日本文学史が、どのように構想されているのか、みておくのは無駄なことではないであろう。戦後文学史に関する論述は多いが、ここでは割合いまとまった三つのそれらを通してみておきたい。まず一つは、一九七三年（昭和四十八）に「戦後文学史の構想」として、戦後文学の時期区分を取りあげた、雑誌『国文学』⁽¹¹⁾である。それは、次のように四つの時期に分けている。

- 1 占領下の文学 昭和二十年～二十六年
 - 2 転換期の文学 昭和二十七年～三十四年
 - 3 高度成長下の文学 昭和三十五年～四十五年
 - 4 内向の世代 昭和四十六年以降
- 1を「敗戦と既成文学の動向」以下六項目、2を「第三の新人の登場」以下五項目、3を「反リアリズムの文学」以下四項目、4を「現代文学の多様性」他一項目というふうに細目に分けて4つの時期区分をそれぞれに論じていっている。これは、かなり早い時期になされた戦後文学史の時期区分であると思うが、この「戦後文学史の構想」から五年たってまとめられたのが『戦後日本文学史・年表』⁽¹²⁾である。それは、次のような三つの時期区分になっている。
- 1 戦後変革期の文学 敗戦から一九五〇年代へ
 - 2 戦後文学の転換 講和条約から一九六〇年代へ
 - 3 日常的現実と文学の展開 一九六一年から一九七七年

「戦後文学史の構想」がそうであったように、この三つからなる時期区分も、1を「敗戦直後の文学状況」から「戦後文学の発展」まで十七章、2を「講和条約の底流」から「一九六〇年代に向って」まで十五章、3を「現代人の孤独」から「日常性の文学(Ⅳ)」までの八章というふうに組み立てて論及している。これは、戦後文学史の一つの体系を打ち立てたものと言ってしかるべきものである。

あと一つは、『戦後日本文学史・年表』と同年に出た『戦後の文学』⁽¹³⁾であるが、それは次のように六つの時期に区分してある。

- 1 〈戦後〉の出発 昭和二十年代前半
- 2 戦後文学の展開 昭和二十年代後半
- 3 〈戦後〉意識の転換 昭和三十年代前半
- 4 大衆社会状況と戦後文学 昭和三十年代後半
- 5 成熟と喪失の情況 昭和四十年代前半
- 6 〈戦後〉から現代へ 昭和四十年代後半

『戦後の文学』の場合も、前二書と同様に、1 2 3 4 6をそれぞれ四項目、5を三項目に細分し論じている。

これまであげてきたように、戦後日本文学史の時期区分の方法は、大きく分けて三つの時期、四つの時期、あるいは六つの時期というふうに、それぞれの区分の方法がみられるわけであるが、まとめ

てみてみるといずれの方法も、時代をどう区切るかということと関わっているといえよう。それは、文学が時代と密接なつながりを持っていることの明確な証しであるし、その時代の区切り方が、言ってみれば「占領下」にあった沖縄と、はっきり異なるということになる。

日本本土の戦後文学史の時期区分と、沖縄のそれとをみていけば、岡本の方法が、『戦後日本文学史・年表』の区分する方法と類似しているようにもみられようが、それは三期に分けてみるという点の類似であって、その内容に関しては大きな隔たりのあることは多言するまでもない。しかし、その内容の相違を、中央と地方との差とみるのは一面的であって、やはり沖縄のもった戦後の歴史、新崎の指摘にあった「相対的独自性」、すなわち「占領下」という異民族支配下において、独自の歩みをせざるを得なかったという問題がそこには写し出されているといえるはずである。

本土における戦後文学の変化は、敗戦後の混乱から目もくらむような速さで高度成長期に移向していったそれと関連し、まさに激しい変化をみせたわけであるが、沖縄においては、それほど急速な変わりがたをしていったとはいえない。それは、戦争によってすべて破壊された政治、経済機構の立て直しに早急な回復を望むことができなかった、という問題と同時に、生き残った人びとのところに深い虚脱感があつて、そこからすばやく歩み出すことができなかったというような事情があつたことによると言えるはずである。それほどに、戦争の傷跡は深かつた。

新崎盛暉の時期区分をみると、戦後沖縄の歴史は、長くて四ヵ年、普通二ヵ年を区切りとする異常

に思えるほどの早い時代状況の変化が起こっていることが解るものになっていった。しかし、その二―四カ年の変化軸を、これまで取り上げた三つのそれぞれの戦後文学史の時期区分にみられる細項目にあたるものとして考えてみれば、それほど驚くに値するほどのものでもないし、岡本の文学活動からみた区分の三期に、細項目として新崎の区分を入れてそれらと比較してみれば、乏しい変化であるようにすら思われもするのである。勿論、それは文学史的事項と歴史的事項とを混同した極端な論であるわけで、二―四カ年を基本とする歴史的事項による時期区分は、激しい変化をあらわしていると言える。ただ、その変化が、外的要因に強く規制されて起きていることは指摘するまでもないし、そしてその要因は、すべて敗戦を契機として生じたものであったのである。

沖繩が「相対的独自性」を持って歩まざるをえなかった占領下時代の歴史を作ったのは、戦争であったわけであり、占領下時代は、またそういう意味で言えば、見えない戦争の継続した期間であるとも言える程である。とすれば、その期間の中心軸に戦争をおいてみることは、確かに重要なことであるし、また、戦後沖繩文学史の一側面として戦争文学史を編んでみることは、大層意味のある仕事であるように思えるのである。

沖繩を壊滅させた戦争が、文学作品にどのように反映されたか、そしてそれらは、岡本が区分した時期とどう重なっているか、これから考えていきたい。そのためには、まず戦争文学とは何か、あるいは戦争文学とはどういうものを指してそういうか、という基本的な考えを出しておかなければなら

ないわけであるが、ここではとりあえず、沖縄の戦闘に材をとって書かれたもの、という大きなとりかたをしておきたいと思う。

野呂邦暢は、その著『失われた兵士たち 戦争文学試論』の中で、「さしあたって戦争文学の定義をしておこう」として、「ここでとりあげる戦争文学とは、今次大戦で戦争に参加した日本人が、戦争について書きしるした文章のことである。狭い意味の〈文学〉にはとらわれないことにする」というように書いてあるが、ここでは、野呂の定義を踏んで、沖縄戦に材をとったもので、「狭い意味の〈文学〉にはとらわれない」ことにしたい。

沖縄戦を扱った書物が膨大な量に上ることは最初に触れたが、その実数及び書名、刊行年月日については一覧表を別に作ることにして、ここでは、とりわけ話題を呼んだものをざっと網羅しておくのみにとどめたいが、ここに上げられただけでも、十分に色々なことが解るようになってはなっていないはずである。次にそれらを刊行順に上げておきたい。

- 一九四七年十一月 古川茂美『沖縄の最後』
- 一九四九年一月 古川茂美『死生の門』
- 一九四九年十二月 宮永次雄『沖縄俘虜記』
- 一九五〇年八月 沖繩タイムス社『鉄の暴風』
- 一九五一年七月 仲宗根政善『沖縄の悲劇』

- 一九五三年六月 大田昌秀・外間守善『沖繩健児隊』
- 一九五九年四月 金城和彦・小原正雄『みんなみの巖のはてに』
- 一九六七年十月 吉村昭『殉国』
- 一九七〇年三月 曾野綾子『生贄の島』
- 一九七一年六月 沖繩県史『沖繩戦記録1』
- 一九七一年九月 曾野綾子『切りとられた時間』
- 一九七二年十一月 田宮虎彦『沖繩の手記から』
- 一九七三年五月 曾野綾子『ある神話の背景』
- 一九七四年三月 沖繩県史『沖繩戦記録2』
- 一九七四年十二月 那覇市史『戦時記録資料篇第2巻中の6』
- 右の年表を一見すればすぐに気づくはずであるが、敗戦から一九四九年までは、沖繩の戦闘を体験した本土人の作品が刊行されて、現地沖繩在住の体験者による作品は刊行されていない。
- しかし、一九五〇年代に入ると、沖繩タイムス社の『鉄の暴風』⁽¹⁴⁾を皮切りに、沖繩における戦いの恐らく最も貴重な記録作品であり、歴史的価値を持つと考えられるものが相次いで刊行されているのである。それは、五一年の『沖繩の悲劇——ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』であり、五三年の『沖繩健児隊』であり、そして五九年の『みんなみの巖のはてに——沖繩の遺書』である。その中でも、とり

わけ『鉄の暴風』『沖繩の悲劇』『沖繩健児隊』の三著は、沖繩の戦記文学における「三本の柱」とでも呼ぶべき大切な作品である。そしてこの三つの作品は、いずれも体験者によって書かれ、編まれたものであると同時に、沖繩の人によってみつめられた戦争であった。

一九六〇年代に入っても、沖繩戦に関する記録作品は刊行され続けるが、六七年になって『殉国』があらわれてくる。そして、沖繩の戦記物はまたここで一つの変り目を作ることになるようである。というのは、沖繩戦を体験しなかった、いわゆる本土で活躍している一線の作家たちによる、沖繩戦を素材にした作品が刊行されはじめ、ここから本土側の多くの人々の目にとまるようになったと思われるからである。

一九七〇年の『生贖の島』、七二年の『沖繩の手記から』、そして七三年の『ある神話の背景』というように、話題を呼んだ作品が六〇年代後半から七〇年代初期にかけて刊行されていく。

六〇年代後半から七〇年代前半にかけて、そのように非体験者である本土在住の作家たちによって、沖繩戦を素材にした小説作品が現われてくるのであるが、七〇年代に入ると小説作品とは別に、いわゆる体験談ブームが始まり、それはなお現在続いているといえる。

右のような記録作品の推移をもとにして、沖繩戦記録・文学の時期区分をすると次のようになる。

第一期 敗戦から一九四九年まで。

本土出身の兵士によって書かれた作品を中心として沖繩戦が紹介された時期。

第二期 一九五〇年から一九六〇年代前半まで。

沖繩出身の体験者によって書かれた実録類の出現した時期。

第三期 一九六〇年代後半から一九七〇年代初期まで。

沖繩戦を体験しなかった本土在住の作家たちによって沖繩戦が書かれた時期。

第四期 一九七〇年代初期から現在まで。

非戦闘員であった人びとの戦争体験を集め記録化した時期。

沖繩戦記録・文学の時期区分として今の所右のように四期に分けて考えることが出来るのであるが、しかし、それですべてがおおいつくせるというわけではない。その詳細については、第一期から第四期までの各期についての項であらためて論じていくべきものであり、ここでは省略するが、この時期区分を、岡本の時期区分と重ねてみると、不思議と一致しているように思える。

それは、偶然の一致として簡単にかたをつけてしまうことのできるようなものではない。その一致は、一言で言ってしまうえば、戦争を扱う作品ほど、よく時代を反映するという意味で、文学史的状况の推移と引合っているとと言えるであろう。

沖繩戦を扱った作品は、先程上げた一覧表から解るとおり、決して沖繩の人によって早くに書かれたわけではない。小説作品となるとさらにおくれることになるが、そこには、戦争が容易に作品化できなかつたという事情、というより、戦争そのものを自分から切り離して対象化するということがそ

れほど容易でなかったという問題があったように考えられるはずである。

しかし、そういうことよりも、そこには明らかに戦前から戦中にかけて信じ込まされ、信じ込んできた一つの絶対的価値の崩壊の問題が大きく横たわってあった、という大切な問題がある。特に沖縄は、明治以降日琉同祖を主張するあまりに、県民一体となって同化志向の中で生き方を規制された歴史を持っていたということもあり、他府県に比べ強烈に「天皇制」体制にのめり込んでいったという事実を看過することはできないであろう。

「皇民化」教育は、言うまでもなく沖縄でだけなされたものではない。それは全国で徹底的になされたはずであるが、特に沖縄の場合、遅れて登場したという歴史的背景によって、焦眉の急の問題であったし、差別感や劣等感を排除していく恰好のものとして、それは普く強力に推進されていったのである。

本土の戦後文壇は、老大家たちの復活と、第一次戦後派と呼ばれる、いわゆる戦中なんらかのかたちで社会主義思想に触れ反体制的な考えを持っていた人たちとの共存によって始まったわけであるが、沖縄において、そういう現象がみられなかったのは先程述べたことと無関係ではないであろう。

戦争文学について言えば、野呂は、先程上げた著書の中で「戦争文学の名のもとに一括される作品はほぼ次のようなものである」として、「一、桜島（鹿児島）梅崎春生、二、俘虜記（ミンドロ島）大岡昇平、三、出発は遂に訪れず（奄美大島）島尾敏雄、四、真空地帯（大阪）野間宏、五、夏の花（広島）

原民喜、六、遁走（北滿）安岡章太郎、七、生きている兵隊（中国）石川達三、八、極光のもとに（シベリア）高杉一郎、九、遙拝隊長（内地）井伏鱒二、十、戦艦大和の最期（鹿児島沖）吉田満」の十冊十名の作家を上げ、そして「注目すべきは著者がほとんど最高の教育を受けていることである。東大が二人、京大が二人、九大が一人、慶大が二人、早大が二人、高等師範（教育大）が一人ということになる。大学卒業者がきわめて少なかった当時としては高い割合であるといえる。書かれた文章の背後には戦争を批判することのできる教養があった」とコメントをつけているが、代表的な「戦争文学」をとってすぐに言うことはできないにしても、「戦争文学」そのものを生みだした基盤が奈辺にあつたかを、それは一応考えさせるはずである。それからすれば、沖縄ですぐに「戦争文学」が生まれなかった理由はある程度はつきりしていると言えるであろう。それは「戦争を批判することのできる教養」を欠いていたということからだけでなく、あと一つその「批判」を表出する手腕も残るからである。そしてまた、戦争によって多くの有為の人材を失ってしまったという問題もあるはずである。そのように、いくつかの要因によって、沖縄在住の人による「戦争文学」の出現はおくれるが、しかし、それはここでの大きな問題であるわけではない。ここでは、沖縄の戦いを書いた作品が、敗戦から現在までのようなあらわれかたをしたかについて、戦後文学の動向を視野に入れつつ、大きくまとめてみる作業をおきたかただけである。

注

- (1) 大城将保『六・一三』再考(『沖縄タイムス』唐獅子一九七七、十、三十)をみると、「沖縄戦の終りの日はいつか、いろいろ説がある」として、それぞれより所のある根拠を示しつつ六月十九日、六月二十一日、六月二十三日、七月二日、九月七日とあげている。
- (2) 「慶良間列島への上陸作戦は、三月二十六日午前八時すぎ、まず第七十七歩兵師団第三〇五連隊の阿嘉島上陸から始まった」(大田昌秀編著『写真記録 これが沖縄戦だ』)とあるように、本島上陸に先がけて、すでに沖縄への攻撃は始まっていた。
- (3) 『帝国陸軍の最後』参照。大田昌秀編著『写真記録 これが沖縄戦だ』からの引用。
- (4) 領土内での戦場としては硫黄島があるし、市民の戦闘参加では、南洋諸島とりわけサイパン島、テニアン島でもみられるし、特攻に關しても、沖縄だけが特別であったとは言えないが、しかし、それらは、沖縄戦に於いて特に際だっていたとは言えるはずである。
- (5) 沖縄戦を材にとった作品を対象にして考察した論文として岡本恵徳「沖縄戦戦記について——その初期作品を中心に——」(『琉球大学法文学部紀要国文学論集』第二十三号 一九七九、一)、鳴津与志の「沖縄戦はどう書かれたか——戦争伝説を生みだす土壌——」(『沖縄思潮』第4号 一九七四、七)、仲程昌徳「沖縄の戦記文学」(『文学』四〇巻四号 一九七二、四)等があるが、全体を総括する方法をとっていない。
- (6) 防衛庁戦史室蔵になる、歴大な量に上る「陣中日誌」等も、戦争記録として貴重な資料であるが、一種の作戦記録として別に取扱った方がいいように思える。
- (7) 戦後史双書『戦後沖縄史論』の「序章 時期区分について」の書き出しである。
- (8) 「沖縄問題の二十余年」(中野好夫編『沖縄問題を考える』所収)では第七期までを考えている。

- (9) 「沖繩における戦後の文学活動」(法政大学沖繩文化研究所編『沖繩文化研究』2、一九七五、一〇〇)
- (10) 『新沖繩文学』第四号、一九六七年二月。
- (11) 紅野敏郎、佐藤勝、大久保典夫、吉田熙生がそれぞれの時期を概観し各項目一人が担当し万遍なく触れている。
- (12) 松原新一、磯田光一、秋山駿の三人が各一期ずつ担当している。『現代の文学』別巻、講談社、一九七七年。
- (13) 古林尚、佐藤勝編で作家論を中心に編纂してある。「有斐閣選書」839、有斐閣、昭和五三年。
- (14) 初刊は朝日新聞社刊になっている。